ホッキョクグマのオスの行動特性と管理方法が与える影響

○伊藤 咲良、圓山　あおい
（横浜市立よこはま動物園）

ホッキョクグマ（*Ursus maritimus*）は、生息環境の激しい季節的変化に適応した種である。温帯地域での飼育下においても、1 年の中で摂餌量、体重、行動などに顕著な変化が認められる。よこはま動物園の飼育個体（国際血統登録番号＃1619 雄）においても、2015～2017 年に実施した調査により季節的な行動変化が明らかとなっている。飼育下では日常の作業や飼育環境を大きく変化させることは難しいが、エンリッチメントツールや管理方法を適切に評価することで、動物福祉向上につなげることが可能と思われるため、行動特性を把握し、各季に合わせた飼育管理を行うことを目的として調査を行った。対象個体は、2022 年に天王寺動物園より当園へ移動した国際血統登録番号＃1773 雄である。2021 年 7 月より 2023 年 12 月までの間、展示場での行動観察（目視による直接観察と録画データによる間接観察）を行い、行動特性を把握した。前施設（天王寺動物園）ならびに当園における他個体（＃1619）との比較、管理方法（エンリッチメントツール・夏季寝室開放・担当者の行動）がホッキョクグマの行動に与える影響について解析した。その結果、＃1773 においても季節的な行動変化が確認された。前施設での行動と比較すると、11～12 月の常同行動の発現量に大きな差異を認め、よこはまでは水中行動（移動やエンリッチメントツール操作）の発現量が増加した。また、先行調査の＃1619 との比較では、同様に２月の常同行動の発現量増加が認められた。エンリッチメントツールは、周年利用可能であるが、常同行動の発現量には増減がみられるため、常同行動抑制には関与していないことが明らかとなった。そのため、常同行動の多い２月には新たな対策が必要となるが、常同行動が減少し、操作が増加する 11～12 月にエンリッチメントツールを効果的に与えることで、ホッキョクグマの多種多様な行動をより引き出すことが可能と思われる。暑熱対策として寝室開放する夏季期間は、７～８月は寝室の利用が大半を占めていたものの、9 月は同じ管理下において展示場で過ごす時間が増加し、過ごしやすい場所をホッキョクグマ自身が選択していることから、福祉上効果的な管理方法と考えられる。担当者の獣舎内作業時前後の行動変化では、常同行動の発現量減少が確認され、担当者の行動がホッキョクグマに影響があることも明らかとなった。こうして季節ごとに要求が異なり、行動変化が顕著な飼育下におけるホッキョクグマの福祉向上のためには、各季の変化に合わせた飼育管理を行うことが重要であると思われる。